

問題・解答
用紙番号

46

の解答用紙に解答しなさい。

国 語

〈受験学部・学科〉

3科目型 受験者

3科目型と2科目型の併願受験者

理工学部(生命科学科)、看護学部、

農学部【理系型】(農業生産学科・応用生物科学科・食品栄養学科)

2科目型 受験者

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、

理工学部(住環境デザイン学科【文系型】)、看護学部、

農学部【文系型】(食農ビジネス学科)

問題は100点満点で作成しています。

I 次の文章A・Bを読んで、後の問いに答えなさい。なお、文章Aは谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』を抜粋したもの、文章Bは『陰翳礼讃』について論じたものである。(五五点)

【文章A】

私は、京都や奈良の寺院へ行つて、昔風の、うすぐらい、そうしてしかも掃除の行き届いた^{かみ}廊へ案内されることに、つくづく日本建築のありがたみを感じる。茶の間もいいにはいいけれども、日本の^{とせ}廊は実に精神が安まるようにできている。それらは必ず母屋から離れて、青葉の匂いや苔の匂いのしてくるような植え込みの陰に設けてあり、廊下を伝わっていくのであるが、そのうすぐらい光線の中にうすくまって、ほんのり明るい^①シヨウジの反射を受けながら^{めいそう}瞑想に耽り、または窓外の庭のけしきを眺める気持ちは、何ともいえない。漱石先生は毎朝便通に行かれることを一つの楽しみに教えられ、それはむしろ生理的快感であると言われたそうだが、その快感を味わううえにも、閑寂な壁と、^{せいせい}清楚な木目に囲まれて、目に青空や青葉の色を見ることのできる日本の^{とせ}廊ほど、格好な場所はあるまい。そうしてそれには、繰り返して言うが、ある程度の薄暗さと、徹底的に

1 であることと、蚊の^な呻りさえ耳につくような静かさが、必須の条件なのである。私はそういう^{とせ}廊にあつて、しとしとと降る雨の音を聴くのを好む。ことに関東の^{とせ}廊には、床に細長い掃

き出し窓がついているので、軒端や木の葉からしたたり落ちるアンテキが、石燈籠の根を洗い飛び石の苔を湿おしつ土に沁み入るしめやかな音を、ひとしお身に近く聴くことができる。まことに厠は虫の音によく、鳥の声によく、月夜にもまたふさわしく、四季おりおりのもののあわれを味わうのに最も適した場所であって、おそらく古来のハイジンはここから無数の題材を得ているであろう。さすれば日本の建築の中で、一番風流にできているのは厠であるともいえなくはない。すべてのものを詩化してしまう我らの祖先は、住宅中でどこよりも不潔であるべき場所を、かえって、雅致のある場所に変え、2と結び付けて、なつかしい連想の中へ包むようにした。これを西洋人が頭からアジヨウ扱いにし、公衆の前で口にすることをさえ忌むのに比べれば、我らのほうが遙かにケンメイであり、真に風雅の骨髄を得ている。

(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』)

【文章B】

『陰翳礼讃』が最初に英訳されたのは第二次大戦中の一九四二年のことで、日本外事協会(Foreign Affairs Association of Japan)の機関誌*Contemporary Japan*に翻訳が掲載されている。この雑誌は日本陸海軍と外務省が関与していた対外宣伝誌であるが、実際の海外での購読者は一部の専門家に限られていたようだ。

一方、第二次大戦後に英語圏で『陰翳礼讃』の本格的な紹介を行ったのが、サイデンステッカーである。コロラド大学を卒業後、アメリカ海軍日本語学校で日本語を学んだサイデンステッカーは、海兵隊付情報将校となり、戦時下の硫黄島やハワイ、そして第二次大戦後は長崎の佐世保で勤務した。その後、一九四六年には戦後処理の任務を終えてアメリカに帰国するが、一九四八年に国務省の外交官として再来日し、一九五〇年からは東京大学大学院で学んでいる。同大学院には一九五五年まで在学しており、その後は上智大学で教鞭をとりながら翻訳家として活躍することになる。谷崎の小説『鬚喰う虫』の英訳(一九五五年)や、川端康成の小説『雪国』の英訳(一九五六年)などを通じて、日本文学の国際的な紹介を行ったことも広く知られている。

サイデンステッカーが『陰翳礼讃』を翻訳したのは東大大学院在学中のことで、谷崎の作家紹介と『陰翳礼讃』の解説を交えた部分的な抄訳を、朝日新聞社の*Japan Quarterly*創刊号(一九五四年一〇月、以下『ジャパン・クォーターリー』と表記する)で発表している。

英文季刊誌『ジャパン・クォーターリー』は、朝日新聞社七五周年記念事業の一環として企画された雑誌で、同誌の編集を担当した島田巽によれば、外国語教員で翻訳家でもあったグレン・ショーの紹介で、サイデンステッカーも同誌に参加することになった。島田は「創刊号のために何か訳してみたい作品はないか」とサイデンステッカーに質問したところ、「谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』をやってみたい」という回答が「こだまのようにはね返ってきた」のだという。

この創刊号には日本国外からも反響が寄せられたが、『陰翳礼讃』に関するものが最も大きく、たとえば「ニューヨークのジヤパン・ソサイアティから会報へ転載したい」という申し入れもあった。そして実際に、サイデンステッカーによる『陰翳礼讃』の解説と抄訳が、多少の語句の修正を加えて、アメリカの雑誌 *The Atlantic Monthly* (『アトランティック・マンズリー』) の別冊日本特集号(以下、「日本特集号」と表記する)で再発表されることになる。雑誌『アトランティック・マンズリー』は一八五七年に創刊された総合雑誌であり、アメリカの歴史あるメディアに掲載されたことで、『陰翳礼讃』は海外の読者を獲得していくのである。

サイデンステッカーが日本特集号に発表した『陰翳礼讃』の解説と抄訳(以下、抄訳版『陰翳礼讃』と表記する)については、作家で文学研究者のグレゴリー・ケズナジャットによる重要な研究論文がある。その先行研究で確認しておきたいのは以下の三点である。

一点目は日本語原典の削除に関する問題である。サイデンステッカーの部分的な翻訳には、意図的な削除が見られる。具体的には、サイデンステッカーが「汚い」と判断した部分は「徹底的に削除され」ており、さらに「西洋」または「西洋人」に言及した箇所も「完全に排除」されている。

二点目は日本イメージに関する問題である。戦時中、アメリカ国内の映画や図像では、日本は「男性的」「暴力的」「野蛮」などのイメージで表現されていた。しかし戦後の冷戦期になると、日本をアメリカの新たな同盟国として位置づけるために、アメリカ国内の日本イメージを刷新する必要が生じた。その際に重要な役割を果たしたのが、一九世紀末にアメリカで流行したジャポニスムである。冷戦期の作家や学者たちは、過去のジャポニスムを甦らせ、人形のような日本人女性のイメージや、真面目な生徒、珍しくて神秘的な骨董品など、ステレオタイプな日本のイメージを数多く作り出した。その結果、「女性的」「従順」「繊細」などの日本のイメージが生みだされ、日本人はアメリカ人にとって 3 となったのである。しかも『陰翳礼讃』にはジャポニスムを代表する小説、ピエール・ロチ『お菊さん』と類似した日本人女性のイメージが表現されていた。つまり『陰翳礼讃』は「西洋の読者に理解しやすい日本像」を提示している。

三点目は政治的な問題である。抄訳版『陰翳礼讃』を掲載した日本特集号や、谷崎の英訳版『蓼喰う虫』は、フォード財団の支援によって刊行されていた。つまり抄訳版『陰翳礼讃』とは、「冷戦時代の自由主義の金銭的な支援によって可能」になった出版物だったのである。

最後の三つ目の問題点については、文学研究者の榎原理智による研究も存在する。日本特集号は、詩人で出版人でもあったジエームズ・ラフリンがフォード財団の資金を使って発行したものだ。フォード財団は冷戦期アメリカの文化戦略において大きな役割を果たしたことで知られている。ラフリンは「冷戦の文化政治の武器」として「文学」を位置づけており、「多くの知られざるアメリカ文学・日本の文学」を翻訳し、西ヨーロッパ諸国へ紹介しようと試みていたのである。

榎原が注目するのは、アメリカの特殊な立場である。日本特集号に掲載されたジャーナリストの

ノエル・ブッシュによる記事を分析すると、アメリカの微妙な立場が明らかになる。アメリカは日本を相手とするときは「西洋」というカテゴリに入るが、西ヨーロッパ諸国と比較されると元植民地という立場になる。つまりアメリカは政治的にはソ連と並ぶ西側のリーダーであるが、ヨーロッパと比べると文化面での 4 の国家になってしまうのである。

この 4 という評価を払拭し、西ヨーロッパでのアメリカの文化的な存在感と影響力を増大させるために、ラフリンは西ヨーロッパ諸国の知識人を「審美的」かつ「理性的」に「説得」しようと考えた。その文化戦略の一環として、知られざる日本「文学」を発掘して西洋に広めることで、文化国家アメリカのイメージを創出しようとしたのである。

Y

以上の先行研究を要約すると、サイデンステッカーの抄訳版『陰翳礼讃』は、政治的美学化が生みだした産物だった、とまとめられる。冷戦という特殊な時代状況において、アメリカの新しい同盟国という日本像を創り出すために、あるいは西ヨーロッパ諸国でのアメリカの文化的な影響力を増大させるために、つまりそれらの政治的な目的を達成するために、サイデンステッカーは「抄訳と解説」という操作を行うことで『陰翳礼讃』を「美的に切り取ろうとしたのである。

このようにサイデンステッカーの翻訳の背後には、冷戦期の文化政治という問題が横たわっている。しかし実際に抄訳版『陰翳礼讃』を通読すると、⁶先行研究では説明できない点⁶がいくつか浮かび上がってくる。

たしかにサイデンステッカーは自分が「汚い」と考えた部分を意図的に削除している。この「汚い」に該当する記述としては、『陰翳礼讃』の「廁」に関する叙述が挙げられる。ただし「廁」に関する記述は全て削除されたわけではない。^d谷崎は「日本建築の中で、一番風流にできているのは廁である」と述べていた。その点を踏まえて、サイデンステッカーは抄訳版『陰翳礼讃』の解説部分で、谷崎が「昔の生えた日陰のトイレ」を「日本建築の中で最も詩的な場所」とみなしていた、と紹介している。

別の点も考えてみたい。たしかにサイデンステッカーの抄訳には、日本語原典の『陰翳礼讃』に記されていた「西洋」や「西洋人」に関する言及を排除する傾向がある。具体的には、ブルーノ・タウトが登場する部分や、白人による人種差別の記述は削除されている。

しかしサイデンステッカーは、日本語原典の『陰翳礼讃』に記されている「西洋」と「東洋」に関する比較については丁寧に翻訳している。たとえば「もし東洋に西洋とは全然別箇の、独自の科学文明が発達していたならば、どんなにわれわれの社会の有様が今日とは違ったものになっていたであろうか」という記述や、続く「西洋の方は順当な方向を辿って今日に到達した」が、東洋では「過去数千年来発展し来た進路とは違った方向」へ進んだために、様々な「故障や不便」が発生

しているという部分、さらには「支那や印度」が「自分たちの性に合った方向」に「進歩をつづけ」、「他人の借り物でない」「自分たちに都合のいい文明の利器を発見する」ことができたらう、と想像する部分は全て翻訳されている。

右の翻訳部分は、多文化的な開化論が展開された箇所であり、『陰翳礼讃』全体の中でも特に思想的に重要な章段である。つまり「美」的な記述ではなく、文化批評的な章段である。このようにサイデンステッカーの「抄訳と解説」には、日本語原典『陰翳礼讃』の内容を忠実に伝えようとする姿勢も認められる。

たしかに東大大学院在籍当時のサイデンステッカーは、フォード財団から研究員として援助を受けており、アメリカによる文化戦略の実質的な構成メンバーだった。しかしサイデンステッカーは『陰翳礼讃』を意のままに切り取って、自由に編集できる立場にいたわけではない。なぜなら抄訳版『陰翳礼讃』を手にする読者の中には、アメリカや西ヨーロッパ諸国の知識人の他に、もう一人の重要な読者がいたからである。その読者とは、原作者の谷崎である。

英文季刊誌『ジャパン・クォーターリー』編集者の島田巽は、サイデンステッカーから『陰翳礼讃』の翻訳に関する希望を聞いた後、翻訳の許可を得るために、一九五四年八月二日に熱海の谷崎邸「後の雪後庵」を訪れている。その際、島田と谷崎の間では「サイデンステッカー氏のことなどが話題になった」のだという。自作を熱心に読んで翻訳しようとするアメリカ人に、谷崎は特別な関心を抱いていたはずだ。

実は前年の一九五三年夏に、サイデンステッカーは中央公論社長の嶋中雄作に仲介してもらい、熱海にいた谷崎を訪問している。谷崎から小説『蓼喰う虫』の翻訳に関する許可を得るためである。そして翌一九五四年五月に、サイデンステッカーは『蓼喰う虫』の翻訳が完成したことを谷崎に報告している。この翻訳について、谷崎がサイデンステッカーに送った書簡には、「御訳文を全部通読しますまで暫くの間コピーを手もとにお預け置き下さるようお願い申します」と記されている。谷崎は優れた英語読解力の持ち主だった。つまり谷崎はサイデンステッカーの翻訳を検閲していたことになる。

一方、『陰翳礼讃』の翻訳については、サイデンステッカーは抄訳版『陰翳礼讃』が掲載された『アトランティック・マンスリー』別冊日本特集号を谷崎に送っている。つまりサイデンステッカーは、著者の谷崎が読んでも問題のない「抄訳と解説」を行う必要があった。しかも、その後も谷崎は、サイデンステッカーが自作を翻訳した際には、サイデンステッカーの訳文だけでなく、現地のアメリカで翻訳発表された自作に対する書評や批評まで細かくチェックすることになるのである。

このようにサイデンステッカーの抄訳版『陰翳礼讃』には、ある種の葛藤が保存されている。抄訳版『陰翳礼讃』は、先行研究が明らかにしていたように、冷戦期における政治の美学化という役

割を担っていた。しかしそれと同時に、サイデンステッカーの抄訳版『陰翳礼讃』は、原作者の谷崎が検閲官のように読むことを想定した翻訳でもあった。つまり抄訳版『陰翳礼讃』とは、サイデンステッカーと谷崎という二人の関係性が埋め込まれた翻訳でもあったのである。

(西村将洋『谷崎潤一郎の世界史』一部改変)

* プルーノ・タウト……ドイツの建築家。一九三三年に来日し、日本の伝統的な建築を讃え、『日本美の再発見』などの著書を残した。

問一 波線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

① ショウジ

- ア 社会ホシヨウを充実させる
- イ 剣や盾にモンシヨウを刻む
- ウ 案を正式にシヨウダクする
- エ 応募作がゲキシヨウされる

② アンテキ

- ア コテンの教養を身につける
- イ 資料をメールにテンプする
- ウ 事態がコウアンして助かる
- エ 朝礼で社員のアンコを行う

③ ハイジン

- ア ハイニンにより信頼を失う
- イ ハイユウの演技に感動する
- ウ ハイシャクした備品を返す
- エ 店のハイギョウを決断する

④ フジヨウ

- ア 彼はオンジヨウのある人だ
- イ 資産のシヨウトに同意する
- ウ 組織にシジヨウ作用がない
- エ 敗北はヒツジヨウであった

⑤ ケンメイ

- ア テンメイに従って行動する
- イ 管弦楽にカンメイを受ける
- ウ 彼は私の生涯のメイユウだ
- エ 注文のメイサイを確認する

問一 空欄 1、4 に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。なお、4 は本文中に二箇所ある。

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------------|-------------------------|
| 1 ア 質素 | 2 ア 花鳥風月 | 3 ア 人智を超えた存在 | 4 ア 孤高 |
| イ 自然 | イ 枝葉末節 | イ 最も頼もしい存在 | イ 二流 |
| ウ 清潔 | ウ 有象無象 | ウ 謎に包まれた存在 | ウ 欺瞞 <small>ぎまん</small> |
| エ 粗末 | エ 和洋折衷 <small>せつちゅう</small> | エ なじみやすい存在 | エ 無知 |

問二 傍線部 a 『陰翳礼讃』の本格的な紹介」とあるが、『陰翳礼讃』の翻訳について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 『陰翳礼讃』が海外で読まれるようになったのは、アメリカで長い歴史のある総合雑誌に転載されたことが一因である。
- イ 『陰翳礼讃』を翻訳したサイデンステッカーは、谷崎潤一郎や川端康成の小説を国際的に紹介したことで知られている。
- ウ 『ジャパン・クォーターリ』創刊号は海外でも話題になり、特に『陰翳礼讃』の抄訳と解説には大きな反響があった。
- エ 朝日新聞記念事業の雑誌に参加していたサイデンステッカーは、その創刊号で『陰翳礼讃』を翻訳することを希望した。
- オ 最初に英訳された『陰翳礼讃』の海外の読者は、陸海軍や外務省によって一部の専門家に制限されていたと見られる。

問四 傍線部 b 「グレゴリー・ケズナジャット」の研究によれば、サイデンステッカーによる『陰翳礼讃』の抄訳にはどのような問題があったか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 自由主義側が日本を同盟国と位置づけるために谷崎潤一郎を金銭的に支援していたという内々の事情があった。
- イ 冷戦期のアメリカでジャポニズムを通じて典型的な日本像が作り出され、これを背景とした表現がなされている。
- ウ 日本語原典が汚れていて読み取りにくい箇所については、西洋の読者に配慮して徹底的に削除してしまっている。
- エ 日本が西洋または西洋人を「男性的」「暴力的」「野蛮」とイメージした記述をことごとく省略してしまっている。
- オ 人形のような女性、真面目な学生、神秘的な骨董品などが数多く描かれていた日本像を刷新する必要があった。

問五 段落 Y には次の五つの文が入る。正しい順番に並び替えたとき、四番目に来る文はどれか。次のア～オのうちから選びなさい。

- ア この形式においては「読みの自由度が制限」されており、作品それ自体を読むのではなく、「日本文化に関する知識」を「消費」するように「誘導されてしまう」。
- イ つまりサイデンステッカーの翻訳は『陰翳礼讃』の「非政治化と審美化」を同時に実行していた、と榑原は考察している。
- ウ 特に注意すべきなのは「抄訳と解説」という形式である。
- エ 榑原によれば、サイデンステッカーの抄訳版『陰翳礼讃』は自由主義者ラフリンの文化政治と「見事に呼応」している。
- オ しかも先ほどケズナジャットが論じていたように、サイデンステッカーは「美的ではない内容をできるかぎり排除」していた。

問六 傍線部 c 「先行研究では説明できない点」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 谷崎が廁を最も詩的な場所とみなしていることが分かったため、サイデンステッカーが廁に関する記述の削除を断念した。

イ アメリカによる文化戦略の目的を達成するために、サイデンステッカーは『陰翳礼讃』を意のままに「美」的に切り取った。

ウ サイデンステッカーが削除した箇所は、ブルーノ・タウトが登場する部分や白人の人種差別に関する記述に偏向していた。

エ 『陰翳礼讃』の文化批評的な章段には、サイデンステッカーが日本語原典の内容を忠実に説明しようとする態度が見られた。

オ サイデンステッカーは日本語原典の「西洋」と「東洋」を比較する部分については慎重になり、詳しい解説を差し控えた。

問七 傍線部 d 「谷崎は「日本建築の中で、一番風流にできているのは廁である」と述べていた」とあるが、谷崎がそのように述べたのはなぜか。【文章 A】の内容をふまえ、最も適切なものを次のア～オのうちから選びなさい。

ア どこよりも不潔であるゆえにむしろ風雅の骨髄を得ているから。

イ 京都や奈良の寺院ならではの精神が安まる体験を得られるから。

ウ 漱石のように朝の便通ですら生理的に楽しむことができるから。

エ 四季おりおりのものあわれを味わうのに最も適しているから。

オ 西洋のトイレより日本の廁のほうがはるかに機能的であるから。

問八 傍線部 e 「二人の関係性が埋め込まれた翻訳でもあったのである」とあるが、どういうことか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア サイデンステッカーによる『藪喰う虫』や『陰翳礼讃』の翻訳は、谷崎が英訳文のコピーやアメリカでの評価を確認した後によりやく許可を得たものであったこと。

イ サイデンステッカーが冷戦期におけるアメリカの政治的な役割を担っていたことが分かり、これを警戒した原作者の谷崎によって細かく検閲された翻訳であったこと。

ウ サイデンステッカーの抄訳は、冷戦期における政治の美学化に基づいて翻訳されただけでなく、自作の翻訳文や解説まで精査する原作者を想定したものであったこと。

エ 谷崎は英語の読解に長けていたため、著者との間で誤訳が問題にならないよう、サイデンステッカーが入念に確認をした上で行われた「抄訳と解説」であったこと。

オ 抄訳版『陰翳礼讃』は、サイデンステッカーがアメリカでの翻訳や書評などを谷崎に送っても支障がないような仲を築いていくきっかけとなる出来事であったこと。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

1*

優生学が二度と許してはならない悪の極北として位置づけられるようになったのは一九七〇年前後であった。

第二次世界大戦の戦後処理の過程では、ナチズムの悪とは、暴力的な政治体制とユダヤ人などの大量虐殺を指していた。大規模に行われたナチスの断種政策は、確かに他の国と比べれば極端なものではあったが、実際には、似たような「保健政策」は、他の国でも実施されていた。断種政策は、五〇―六〇年代には、まだ「問題」として見えていなかったのである。

ではなぜ、七〇年前後にそれまでは視野の外側にあった優生学が「A 再発見された」のだろうか。まとめれば、それは次のように説明することができる。

第一に、六〇年代に公民権運動が起こり、これに続いて社会的なマイノリティ、たとえば障害者や同性愛者などの権利確立運動が起こったこと、第二に、六〇年代後半の反公害運動やベトナム戦争反対運動などが引き金になり、科学技術一般や専門研究者に対して厳しい目が向けられるようになったこと、そして第三に、六〇年代を通して分子生物学が確立し、遺伝の基本原理が初めて分子レベルで明らかにされたことである。ただし、この第三の点の影響は、両義的であった。DNA操作が可能になった以上、きわめて危険だとする確信が生まれた一方、分子生物学の研究が進め進むほどかつての優生政策の非科学性もはつきりするはずだ、とする洞察も生まれたのである。

分子生物学は、DNAが遺伝情報そのものを担う分子であることを完璧に論証してみせた。その結果、DNAは、生命のまぎれもない設計図として、自然解釈の中で非常に高い地位が与えられるようになった。このようななかで、優生学という、いったんは死語となった言葉は、リアリティをもった危機を表すものとして再び使われだし、ナチス優生政策が反面教師の極として位置づけられるようになった。

再発見されたナチス優生学は、七〇年代以降、先端医療やバイオテクノロジーの研究で新しい展開があるたびに、批判の枠組みの基準点の役割を果たすことになった。そして、このようにして成立したナチズム＝優生社会＝悪の極北という図式は、研究や技術使用の場面にナチス優生政策との類似点を見つけ出し、そこに危険が含まれることを喚起する機能を果たすことになった。このような機能をもった優生学を「²危機イメージとしての優生学」と呼ぶことにする。

ここでは、「おぞましい」ナチス優生学がどのように危険かという設問は「B」とみなされた。また、ナチズムの優生政策だけが問題にされ、他の優生政策はあたかも存在しないもののように扱われてきた。他の優生政策を見えなくさせた、この作用は重要である。たとえば、一九九六年まで存在した優生保護法は、ほとんどの日本人の視野の内にはなかったし、優生思想と福祉政策の間に強い親近性があったとする見方も生まれなかった。

確かにナチス優生学は、生物学的に純粋なドイツ・ゲルマン人を一人でも増やそうとする、奇怪な国家目標を実現するための政策の一翼を担ったものである。しかし、ナチズムの悪をその優生政策で代置する解釈図式は、優生学の実証的研究が進めば進むほど、つじつまが合わなくなってくる。だとすれば、「危機イメージとしての優生学」という、歴史解釈を事実上の倫理規範の代用としてきたこれまでの共通意識そのものを検証し、そのなかから、先端医療やバイオテクノロジーに対する批判原理を原理として抽出しなおす必要がある。科学技術の水準の面でも、また歴史的時間の容赦ない流れからも、このような課題にわれわれは直面しているのである。

初期の分子生物学は、研究対象を大腸菌とこれに感染する特殊なウイルスに絞ったために、大成功を取めた。この限りでは、分子生物学はまだ、大腸菌の生物学でしかなかった。しかし遺伝の基本原理は他の生物においても同一であると推定されたから、大腸菌のDNAがわかればゾウのDNAについてもわかったも同然とする主張は、当たり前のように受け入れられた。自然科学のなかで生物学は地味で周辺的な地位にあったから、それは斬新で魅力的な生命観であった。七〇年代には、「DNAは生命の設計図」という比喩が真理同然に受け取られ、DNAはしばしば生命そのものとみなされるようになった。こうしてDNA一元論的生命観は、分子生物学の啓蒙とともに社会に広く浸透していった。

ただし、このことは次のような問題を内包していた。第一に、DNAが生命の設計図であるならば、人間のDNA研究は、人間性をのぞきこむことに限りなく近くなること。第二に、もしDNAの操作が可能になれば、DNAが生命の設計図であるがゆえのはかりしれない可能性と危険性の双方を、招来するかもしれないこと。第三に、そのDNA操作技術を人間に向ければ、人間性そのものの操作が現実のものになるかもしれないことである。

そして、DNAを人為的に操作する遺伝子組換え技術は、予想外に早く、一九七三年の初め、アメリカの大学の一実験室で確立してしまっただけである。

遺伝子組換え実験についての賛否は、七〇年代を通して大論争となっていた。だがその論争の核心は、あくまで実験の安全性についての問題であり、操作の念頭にあったのは微生物であった。いまからみると、当時の研究者は、人間のDNAを操作の対象にしたり、これを直接解読したりしようとする提案は慎重に避けていた。³そこに潜む重大な価値論争を刺激してしまうことを嫌っていたようなのである。逆に言えば、当時、ヒトDNAは不可触のオーラを発していた。そしてこの時期に、ナチズムⅡ優生社会Ⅱ悪の極北という図式も成立したのである。

しかし、このようなヒトDNAに対する不可触の感覚は、八〇年代に入ると色あせていった。すでに七〇年代末には、研究者の間では、大腸菌などの原核生物と酵母以上の真核生物とでは、遺伝子の構造に大きな違いがあることが判明し、微生物とヒトDNAの間の距離の大きさが認識されるようになっていた。一九八〇年には、カリフォルニア大学医学部のマーチン・クライン教授が、い

きなり、遺伝子治療実験を行ってしまった。八一年には、マウスの受精卵にDNAを注入する技術が確立し、翌八二年には、成長ホルモンDNAを注入されたスーパーマウスが誕生した。こうして八〇年代には、哺乳類の遺伝子操作や、人間の遺伝病の原因遺伝子についての研究が飛躍的に進んだ。

「危機イメージの優生学」の立場からすれば、このような研究が進めば進むほど優生社会への危険を招き寄せることになるはずであり、より強い警句が発せられなければならない。だが、優生学に対する危機感は、逆に希薄になっていった。八〇年代中期には、ヒトDNAの直接操作である遺伝子治療も、またヒトDNAそのものを解読しようとするヒトゲノム計画も、正式に提案されはじめた。そこには、人間のDNAに科学の眼差しを向けることへの躊躇や畏怖の感覚はない。

遺伝子治療もヒトゲノム計画も、ともに、これを突出して推進したのはアメリカである。逆にドイツは、九〇年代半ばまでヒトゲノム計画をとりあげなかった。ナチズムの体験が社会の深層心理のレベルでDNAの操作を行うことを抑えていたとみてよい。アメリカ社会においてヒトゲノム計画を支えた論理は、医学医療のためという C であつた。この強烈な現世の実利主義が、ヒトDNAに対する畏怖の感覚を蒸発させていった。だが優生学の歴史を振り返ると、技術を躊躇なく現世の改良に応用しようとするこの態度こそ、かつてこの国の社会が突出して優生政策を推し進めた要因でもあつた。

遺伝子治療に関しては、一九八五年にアメリカで、遺伝子組換え実験のガイドラインを所管するNIH（アメリカ国立衛生研究所）が、遺伝子治療臨床実験のためのガイドライン補遺を公布した。このなかでNIHは、体細胞遺伝子治療については、それまでのガイドラインと人体実験のための規制の手続きをより厳格に守ることで、これを認める道筋を示した。ここでは生殖細胞遺伝子治療には言及しないよう、慎重に配慮された。そして九〇年一〇月、ADA（アデノシンデアミナーゼ）欠損症（重度の免疫異常となる病気）の子供に対する実験計画をNIHは認可し、ただちに臨床実験が開始された。

一方、三〇億塩基対ある人間の全DNAを解読しようとするヒトゲノム計画は、八〇年代半ばにR・シンシャイマーとC・デリシによつて別々に提案されたものとされている。まもなくこれは生物学としては破格の巨大プロジェクトに仕立て上げられ、独立の研究計画としてアメリカ連邦議会にはかれることになった。その審議の過程で、ヒトゲノム研究に対するさまざまな懸念が表明され、これに対応するためにヒトゲノム計画の推進者であるJ・ワトソンは、総研究費の三―五パーセントを倫理的・法的・社会的問題（ethical, legal, social issues: ELSI）に割り振ることを提案した。当初からこのような自己検証のためのプログラムが組み込まれた科学研究計画は、史上例がない。

当時この計画に対して指摘された懸念は、多かれ少なかれ優生社会に連なる問題だつた。かつて

『遺伝子工学の時代』を著したJ・リフキンの批判が代表的なものであるが、彼には、X という信念があるように見える。

ELISプログラムによって遺伝に関わる倫理研究の水蓮は上がったが、結果的に、ヒトゲノム研究特有の予想外の倫理問題は飛び出さず、直面する課題には倫理の基本原則を厳格に適応することで対処できる、という結論になった。その基本原則とは、自己決定、インフォームド・コンセント、プライバシー権である。

だが、⁴これで問題が落ち着いたわけではない。なぜなら、第一に、これらの三つの原則は、主にアメリカのバイオエシックス研究によって確立されてきた原則だからである。今日の先進社会では、現代医療の倫理原則として一応受容されたように見えるが、これが普遍原理として、とくに発展途上の社会に対する解答となりうるかどうかは、疑問の余地がある。第二に、ヒトゲノム計画の進展は、DNAと人間解釈を過剰に結びつける傾向を刺激してしまうことから、逃れられないからである。現在も社会には、そのような思い込みからくる行き違いがいたるところにこらつている。

「危機イメージとしての優生学」が意味していた主要課題の一つは、出生前診断による中絶の是非論に集約されてきた。

この問題に対する原則は、八〇年代を通して、以下のように整理されてきた。検査は、いかなる威圧的な空気もないなかで自発的に行われ、検査を受けたカップルの自己決定によつてのみ以後の決定はなされ、検査の前後に十分なカウンセリングを受けることができ、カウンセリングには絶対に指示的要素が混入してはならない。

優生社会への危機を重視する立場からすると、このように問題を整理すること自体が、問題の矮小化に当たることになる。なぜなら、自己決定の概念をこのように運用することは、社会的な誘導がないようにみえても、個々の先天性疾患に関する情報提供や障害者に対する社会的支援が不十分な現実においては、障害胎児の中絶を迫る優生政策と同じ効果をもつからである。そのような批判の下でなお、カップルの自己決定に一切を委ねること、これが現在の先進国の社会が到達した課題への解答である。

このような考え方においては、かつての集団遺伝学者のように、人間集団を遺伝子プールとみなし、そこでの疾病遺伝子の頻度（集団における遺伝子が存在する頻度）に関心を払ったり、疾病遺伝子のスクリーニングを行う費用と出生後の生涯にわたる治療費の総額との対比から、コスト・ベネフィットを計算する、社会的効率に焦点を合わせるといった、優生学に似た発想は、著しく希薄になっている。Y。

それは、少なくとも理念的には、先進社会が、障害も個性のうちと考えるまでになつたからであるが、このような意識に達したのは最近だということも心に留めておく必要がある。いまもなお、出生前診断を先天異常疾患の予防手段として推奨し、異常が見つかれば中絶を当然視する態度を隠

さない研究者や医者も少なくない。

(米本昌平「生命科学の世紀はどこへ向かうのか」一部改変)

* 優生学……人類の遺伝的素質を改善することを目的とし、悪質の遺伝的形質を淘汰し、優良なものを保存することを研究する学問。進化論と遺伝学を人間にあてはめている。

問一 空欄 へ に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|--------|---|---------|
| A | ア 客観的に | B | ア 優先的課題 |
| イ | 戦略的に | イ | 荒唐無稽 |
| ウ | 否定的に | ウ | 不必要 |
| エ | 優先的に | エ | 無為 |

- C
- ア オプティミズム
 - イ プラグマティズム
 - ウ ポジユリズム
 - エ ヒューマニズム

問二 波線部 a・b の語の本文中の意味として最も適切なものを、ア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a 畏怖

- ア 恐れで身体が震えるような気持ち
- イ 恐れながらも高揚している気持ち
- ウ 恐ろしいが興味をひかれる気持ち
- エ 恐ろしさのあまり逃げたい気持ち

b 矮小化

- ア 細かく分けること
- イ 単純化すること
- ウ 小さくみせること
- エ ゆがめること

問三 傍線部1「優生学が二度と許してはならない悪の極北として位置づけられるようになった」

とあるが、筆者がその背景として考えているのはどのようなことか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 第二次世界大戦中に行われたナチスの優生政策は非人道的なものであったと、改めて世界の人びとに認知された。

イ 人権意識の高まりの中で、優生政策の対象とされていた社会的マイノリティの権利を確立しようとする動きが広まった。

ウ 科学というものをより厳密に見ようとする機運が高まるなかで、優生学は科学ではないと糾弾されるようになった。

エ 分子生物学が発展したことにより、かつての優生政策は明らかに非科学的なものであったと証明された。

オ DNAが自然解釈の中で高い地位を得るようになったことで、DNAの概念がなかった時代の優生学は捨てられるべきだと考えられるようになった。

問四 傍線部2「危機イメージとしての優生学」とはどのようなことか。次のア～オのうちから、

最も適切なものを選びなさい。

ア DNAが生命の設計図であることが明らかになったことで、ナチス優生学を正当化し、優生政策にDNAの操作を応用しようとする事。

イ 分子生物学の発展によりDNAを直接操作することが可能となったが、そうした新しい科学技術に基づかないナチスの優生政策の危険性を主張すること。

ウ ナチス優生学は危険であると叫ぶことがナチス以外の優生政策を見えなくし、他の優生政策という新たな危機を生み出すことになると主張すること。

エ ナチズム＝優生社会＝悪の極北という図式を見直して、優生政策はナチズムの再来を招く危険があると主張すること。

オ 先端医療やバイオテクノロジーの新しい展開があるたびにナチスの優生政策を持ち出し、そこに危険を見出して批判すること。

問五 傍線部3「そこに潜む重大な価値論争を刺激してしまうことを嫌っていた」とあるが、重大な価値論争の論点とはどのようなものか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 人間のDNAを研究し遺伝子を操作することの安全性。
- イ 人間のDNAを研究することで優生学が否定されてしまうことの是非。
- ウ 人間のDNAを研究する際にDNAを生命の設計図とみなすことの当否。
- エ 人間のDNAの研究が人間性をのぞきこみ操作することに繋がるという懸念。
- オ 人間のDNAを研究することでナチズム＝悪という図式が壊れるという危惧。

問六 空欄 X に入る最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 現実に役に立つ技術ならば大いに使うべきである
- イ ヒトDNA研究と優生学とは別に考えられるべきだ
- ウ 技術的にできることならばやってみればよい
- エ われわれは決してナチズムの轍を踏むことはない
- オ われわれは人間改造への誘惑から逃れられない

問七 傍線部4「これで問題が落ち着いたわけではない」とあるが、筆者はどのようなことが問題として残されていると考えているか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 「危機イメージとしての優生学」による優生政策を推進しようとするさまざまな研究が行われたが、結局は「危機イメージとしての優生学」から抜け出すことはできないこと。
- イ 現在世界的に受け入れられている自己決定、インフォームド・コンセント、プライバシー権では、今後予想していなかった先進国の問題には対処できないこと。
- ウ 倫理的問題に対処する原則の一つとして自己決定があるが、疾患や障害に対する情報提供や社会的支援が十分でない場合は社会的誘導があるに等しいこと。
- エ 倫理的な問題に対処するための自己決定、インフォームド・コンセント、プライバシー権という基本原則は、社会的背景が全く異なる発展途上国からは反対や反発があること。
- オ 「危機イメージとしての優生学」の問題は出生前診断による中絶の是非に集約され、出生前診断で異常が見つかった場合は中絶することが当然であるとみなされていること。

問八 空欄 に入る最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア あくまで個人の選択として問題が立てられている
- イ 「危機イメージとしての優生学」の限界であろう
- ウ 個人と社会のどちらを優先するかが問われている
- エ 現世的実利主義を推し進めた到達点がここにある
- オ ヒトDNAに対する不可触の感覚の復活と言える